

やなせ 柳瀬 なおき 尚紀さん／東京都

英文学者



大使を任命



相変わらず年末も年始も原稿に追われる生活で、根室の方々にも失礼を重ねていることをお詫びします。おかげさまで今年もロアルド・ダールの翻訳など、仕事が詰まっています。

来月には『日本語は天才である』（新潮社）という書き下ろしが出ます。この本を書きながら、やはり自分の原点は根室にあるということをつくづく再認識しました。根室弁の中で育ったので日本語を外から眺めることができる——これは一種の特権的観点です。根室弁という故郷があるからこそ、万葉集以来の日本語について語ることができたという気がします。

銅版画家・武蔵野美術大学教授
いけだりょうじ 池田良二さん／東京都



講演会
—東京国立近代美術館—



さんゆうていきんばち 三遊亭金八さん／東京都

落語家

「故郷は最高の応援団」と誰やらが言ってました。

昨年も根室市内では、1月・芭蕉同窓会幹事生として司会、2月・別院寄席、6月・旅館大野屋にて後援会総会、8月・結婚式司会・・・。

東京でも2月・北方領土全国大会司会、5月・東京芭蕉同窓会、8月・ホテルニュー塩原、11月・東京根室会。・・・と、ちょっと手帳を見ただけでも「根室」をキーワードに、これだけの出会いやら、ご縁をいただきました。

あとサンマ時期になると、何箱も送っていただきます。いつも一生懸命配りますが「今年はまだかい？」と催促される有り様です。サンマ同様、「根室ブランドの噺家」になりつつある今日この頃です。



「夢」

新しい年をお迎えし、おめでとうございます。東洋の最東端に位置する根室が私の故郷であることが誇りに思えます。私は時に耐えて現在もあるものに、美しいと感じることが多いです。満九十歳を迎えようとした老学者が「すべては夢のように思われる。しかしその夢は、たしかに現実に連なっている」と記した文章に触れた時、私自身の「絵を描いて他者に何かを伝えよう」と根室で思った夢が、忘却の底から蘇えり、改めて今年も青春の夢に忠実でありたいと思うのです。

新しい年おめでとうございます。

昨年11月に窯を焚きました。年に2回程「登り窯」という薪の窯で鉢や壺を焼いています。炎の赤はすぐに根室の夕陽の赤を連想させます。私の心に深く染み込んだ赤い色です。

又、根室で何かしてみたいと、いろいろ考えてはいるのですが、まとまりません。前回とは別の形で作品を発表出来ればと思っています。

皆様にとって良き年でありますようお祈り致します。

ささき あつし 佐々木 厚さん／福岡県

陶芸家

